

④ 級別各科人員表

昭和二十五年四月一日現在、( )は女子

選科	特別学生	総計	未復員	師範科	建築科	工芸科				彫刻科			油画科	日本画科	各科別
						漆工部	鍍金部	鍛金部	彫金部	図案部	平櫛木彫	平櫛塑造			
		一四				五	一	一		二	一				二年
		(25)		(5)					(1)	(2)		(2)	四(10)	(5)	三年
	二	一五二		一七	一二	八	四	五	七	二	特一	一〇	三八	一七	四年
	一	(25)		(2)	一四	(1)			(1)	(1)	特一	(2)	(12)	二九	五年
一	一	二一九		五	二	一五	四	一	七	〇		五	特一	一九	六年
		二〇		三	二	一	二	一	二	六		一	選一	一	小計
		二				二			(2)	(3)			(22)	(10)	計
一	三	(50)	一四	(7)	二八	(1)	一一	六	一七	一二	特一	一六	七一	三七	
一	三	三三二	一四	二五	二八	三一	一一	六	一七	一二	特一	一七	七四	三七	

⑤ 小場恒吉の日本芸術院恩賜賞受賞

昭和二十五年以降、日本芸術院恩賜賞金が授与されることとなり、その第一回受賞者に、長く本校に勤務した後ち東京芸術大学教授となった小場恒吉(本書第二巻55頁参照)が選ばれた。授賞の理由は『日本芸術院史』(昭和三十八年、日本芸術院事務局)に記されているが、その文のもとになった草稿は本校(藤田亮策原案)が作成したもので、さらに詳しく小場の業績が記されている。これも既に『小場恒吉先生遺作展』(昭和三十四年十月、秋田市美術館)に掲載されているが、ここに改めて原本を紹介しておく。

恩賜賞の受賞理由書

日本文様の研究

小場恒吉

小場恒吉氏の研究は日本文様の時代的特徴と変遷を解明したもので、この道は学者と同時に技術家でなければ能く実体を把握し得ない分野の研究であります。

小場氏は明治三十四年頃より現在まで約五十年の長年月に亘り、世間的には目立たない極めて困難な仕事にもかかわらず、今猶七十有余才の老軀をささげ、寒暑をいとわず営々として所期の目的達成に努めておられます。

その研究範囲は、日本の他に中国及び朝鮮の古墳ないし古建築の装飾から、絵画彫刻の絵文様又は諸般の古美術工芸品に現われた形態、若くは文様などを対照とするもので、総て調査は実測に基づく誠に<sup>(歴)</sup>大なるものであります。